

## 目 次

大学祭始末記 .....	大内 達也 .....	1
雨と涙の大学祭 .....	上村 美雪 .....	2
大学祭私記		
- 「何か」を求めて - .....	安達 淳 .....	2
大学祭、研究室、そしてつながり .....	尾村 保宏 .....	3
教育実習レポート		
教育実習について .....	深 萱 和 男 (日本研究・教授) .....	3
教育実習について .....	井上 志保子 .....	4
「K君の苦悩」 .....	岡安 秀夫 .....	4
教育実習に関して		
僕が言っておきたい一、二の事項 .....	大西 日出和 .....	6
小道具でキメッ!		
- 教育実習について - .....	安居 宏 .....	7
終了の辞に代えて .....	林 信弘 .....	8
外国人の先生方に聞く .....		8
<b>SOME THOUGHTS ON TEACHING ENGLISH at HIRODAI</b> .....	Peter Anthony Goldsbury .....	9
日本人学生にとってのドイツ語とは .....	Wilfried Schütte .....	10
フランス人の見た日本人学生 .....	Gilbert Joseph Louis Vidal .....	11
「ロシア語担当、4年目の感想」 .....	Lyudmila Petrovna Yamada .....	12
シリーズ・学問のすすめ(その16)		
政治思想史余録 .....	舟橋 喜恵 (社会文化研究・助教授) .....	13
科学の入口に立った4日間		
- 大山野外巡検レポート .....	今村 厚子 .....	15
大山巡検		
- 植生を中心に - .....	大原 高志 .....	16
大山巡検日記 .....	西中 勝喜 .....	17
シリーズ・大学研究所めぐり(その7)		
ウィーン大学 .....	西村 雅樹 (言語文化論・助教授) .....	18
学部の記録 .....		20
編集後記 .....		22

# 大学祭始末記

大内達也

11月祭で何をやるかと言う事を、最初に言い出したのは、自分かも知れない。言い出しっぺの何とやらをいい事に、近くに居たKさんを責任者にでっちあげて（Kさんごめん、悪気はないんよ）自分はシャアシャアと（？）副責任者におさまって、計画を練り始めたのが9月下旬であったろう。56生全員参加をスローガンに押し進めた計画なので、語学の時間に宣伝して、第1回総会なるものを持ったのだが、集まったのは40人そこそこ。現実には厳しいぜ。思えばこれが悪夢の始まりであった。

秋休みが終って、本格的準備に入った。15号教室を借りて、茶店（ちゃみせ）をやる。畳を敷きつめ、正面にはドローンと北斎の東海道五十三次を配し、側面にはふすまを設ける。絶えずアトラクションを行ない、かごで森戸道路から送迎して、お客様方に古き良き時代を偲んでもらおうという趣向であった。市中パレードの計画も並行して行なわれた。設定としては、全長6mもあろうかという巨大な地藏さんを、農民達がかついでねり歩きながら、豊年踊りを踊る。突然、供物の団子の山の中から、バルタン星人が現われ出でて、農民達に災いを為す。農民達が、地藏に祈ると、地藏がウルトラマンに変身し、スペシウム光線でバルちゃんをやっつけてしまうのである。「やるからには賞品をとれ！」というのが、我々の旗印であったのだ。

どでかい計画の遂行には企画書が必要——実は、決定事項を書き留めておかなければ、次の日には忘れてしまうというわけ——なので、ノートを1冊購入して、『大学祭始末記』なるものを作り、企画遂行の1から10までを記録して、57生のために残しておいてやろうという話が出た。確かに、これは便利なもので、分担した作業を滞りなく進めるのに大いに貢献した。我々の苦勞と喜怒哀楽を、くまなく見てきたのが、この『始末記』である。

……  
何がいけなかったのだろう。スタッフが何の悪事をしたというのだろう。各係のチーフや、メイン

スタッフ、そして、クラブで忙しい人達も、皆一生懸命やったのだが、あの2日の朝は何なんだ、何で雨が降るんだ、死んで花実が咲くものか。（感情的になったらいかん、結果だけ書こ）市中パレードの中止を確認した時の我々の落胆は、大きいものだった。パレードのチーフのK君（前出のKさんとは別人よ）の胸中を察すると、涙が…あえて出たとは言わぬが、不幸がこれで終る事をひたすら祈っていたのだ。しかし……。

茶店の場所変更の知らせが入ったのは、自分に限って言えば2日の午後、次の日のために風呂で垢を落とし、大学に帰ってきた時。まさしく晴天の霹靂であった。（自分流に言えば）学生課の理解のない態度のために、我々総科56生の茶店は、15号教室を追われ、大学祭実委のテントの一部を借りて営業せねばならなかったのである。11月3日のバザー、この日のために金と手間を注ぎ込んできた室内装飾と数々のアトラクションが、一瞬にして水泡に帰したのである。激しい怒りの次に我々が覚えたものは、「こんな条件で売り上げが伸ばせるのだろうか、皆が善意で投資してくれた金を、果たして返済できるのか。」という不安だった。しかし、思いを巡らせる時間はなかった。あと半日しかない。

バザー当日は、皆休む間も惜しんで働いてくれた。市中パレードの仇を森戸道路で討つとばかりに、ウルトラ地藏とバルタンおじさんが特別アトラクションをやったりもした。赤字解消のために皆必死だ



ったのだ。午後6時45分、我らが和風茶店、『松梅（しょうばい）』は商品を全て売りつくし、満足のいく売り上げを残して閉店した。

56生にとって、初めての11月祭は、苦労とハプニングの連続だった。そのたびに、『始末記』に新たなページを書き加えようと思ったのだが、忙しさでままならず、いつの間にかそれは、スタッフ達から事実上忘れ去られて行った。「行った」とは言うが何処へ行ったのか？『大学祭始末記』は、この企画

## 雨と涙の大学祭

上村美雪

朝起きてみると外は雨だった。二日酔いでボケている私にわかった事は、市中パレードが中止になる事と、中止になる事でもっとおそくまで寝ていられるという事でした。次第に目がさえ事態がのみこめるようになってあらためてガンとききました。市中パレードが中止になる！

2週間前、桐木君が考えついたすごいアイデア、団子がバルタン星人に、地蔵がウルトラマンに変身する。このアイデアを聞いた時本当に実現すると何人の人が考えたでしょうか、しかし帯名君の芸や岡君の職人芸など、多くの人の協力によって本当に完成してしまったのです。それなのに、ああそれなのに、雨がにくい……

研究室にやって来ると、もうみんな来ていて、「しかたない明日、森戸道路でやろう」ということになり、みんなで和風茶店「松梅」の準備をしている時に届いた学生課による、15号教室差し押えの知らせ。えええいいい 学生課の人間はばけものかあっ！

実委、55生との話し合いの結果15号教室をあきらめ、本部テントを半分借りてやるということになりましたが、広川君が家にこもって作り上げた障子、浮世絵はポシャってしかし、こんなことに負ける総科生じゃない。森戸道路での 地蔵と団子は大成功(?)

ええいっ 来年はがんばるぜっ！



おどん

に携わった全てのスタッフの心の中にあるのだ。と書くと、あまりにもわざとらしいのでやめておく。ともあれ(多くの課題を残してではあるが)オニのような大学祭は幕を閉じた。

付 責任者の重任を女の細腕で果たしてくれた上村さん、御苦労さん！！

それから、みんな(僕も含めて)

ほんとにごくろうさん！！

## 大学祭私記-「何か」を求めて-

安達淳

11月1～3日、大学祭と言うものがあった。ふたを開けたら、なんのことはない大学祭定食。森戸道路ではバザーがうごめき、学生会館では、何やらの企画がごたごたと……

こんな風に当日のことだけ書いていたら、それこそ小学生の作文。ただで実際、当日はそんな感じしか受けなかった。それで、前後のちょっと気になったことを書いてみたいと思う。

オールナイト企画について、実委が、がんばっていたようだけど、他の人は、賛成、反対、いつれのレスポンスもしていなかったように見えた。

総科56でバザーをやったが、企画に参加する絶対的人数が足りなくて、皆オーバーワークぎみだった。

バザーを見て回ったら、いつも同じ顔が同じようにわめいていた。

今挙げた例を見れば、何を言いたいかは、わかってもらえると思うけれど、大学祭の作り手と受け手がほぼ完全にわかれてしまっている。はっきり言って、一日中バザーでがんばるのはつらいし、展示してあるものも全部見たい。全員が参加してくれれば、クラブの方で何かあっても、皆が参加し、皆が見物できるのだろうか。

参加していない人はいったい何をしていたのだろうか。それなりの目的、信念(大げさだけど)があるのならそれもいいだろうが、実際はどうなのだろうか。

偉そうに言った僕も、ふり返ってみるとたいしたことやってないし、何かをやろうとしただけの大学祭だったのだけど、この何かやりたいという気持ちだけは持ち続けていたい。

## 大学祭、研究室、そしてつながり

尾村保宏

唐突ながら、研究室の話から始める。

一考するに、学生研究室は様々な活用されている。今回の大学祭でも、時には作業場として、また集合場所として、会議室として、連絡場所として、打ち上げ会場として……。

しかるに、その入れ物に集まる人間はどうか。ほぼ完全に固定化してしまっていると思われる。出入りするのを見慣れた面ばかりである。

このような現状を打開する為、今回の大学祭は、総科56全員参加を目標とした。部活動等で無理な人は別として、なるべく多くの人に仕事を手伝って欲しいと思ったのである。その為、英語の時間前後の呼びかけを、六月祭同様何回か行なった。

結果はどうであったか。資金集めの時は、幾分期待を持った。80名を少し越える人間から集まったのである。新しい顔ぶれが増えるのか、と思ったものである。が、砂糖を蟻が持ち去るが如く、甘い考えは、その日限りで消えた。前売券を売るにしても、協力してくれた人は思いの外少なかったし、(数名、常連でない人に協力していただけた。実に嬉しく思っている。)実際の準備及び店での仕事と来た日には、

よく見る面ばかりである。

こうなってくると、全員参加に何の意味があるのか、とふてくされたくもなる。いくらこちらが騒いでみても、結局相手が動いてくれぬ事には話にならぬ。踊らないのでは、笛も吹き疲れる。

だが、考えて見れば、ディスコで円舞曲を流しても客は踊る筈もない。同一化のおしつけ(?)は嫌われるのみである。大学祭準備の時、『これは強制なんですか』という名言を吐いた人もいる。もっと、人は夫れ夫れにその生活がある、という事を認識すべきではあるまいか。それは、少しでも56生のつながりが欲しい事は確かである。が、研究室派は、総科56だから〇〇であるべきだ、という考えを少しでも持っているなら、それは蓋し捨てるべきかも知れぬ。120人が全員、一方向を向くなど不可能に近いし、その人にはその人なりの生き方、やり方があるのだから。

同時に、研究室派でない人は、その気があるのだとしたら、積極的にきっかけをつかんで研究室に来て欲しい。総科においてすべては研究室から始まると言っても過言ではないのだから。

大学祭と、56生の横のつながりについて書くつもりが、いつの間にやら呼びかけになってしまった。お許し願いたい。

## 教育実習レポート

### 教育実習について

深 萱 和 男 (日本研究・教授)

教育実習のオリエンテーションが、今年からは2日間にわたって行われることになった。実習の2週間をより充実させるために、これまで実習第1日目に組込まれていた生活指導その他の全体的な注意を、事前にすませておくことにした結果である。福山附属の先生方には余分の負担をおかけするわけであるが、先生方は労をいとわず、熱心に指導をしてくださった。この紙面を借りてあつくお礼を申し上げておきたい。

そのオリエンテーションに関連して、教育実習の記録をビデオに収め、それを来年度からのガイド

ンスに利用したらよいのではないかという話が附属から出された。聞けば、福山附属では、クラブ活動でビデオ作りが行われ、よい成績を挙げているとのこと。この話は、福山附属を実習校としている総合科学部・生物生産学部・教育学部福山分校が協力して実現することになった。

とにかく、福山附属で教育実習を受けられるということは、たいへんに恵まれたことで、このことを受講生諸君はよくよく肝に銘じておいてほしいと思う。毎年用意される実習の手引きを見ても、また、上に記したような先生方の熱心さ、そして生徒諸君のかしこさから見ても、おそらく、教育実習校として、福山附属は日本一なのではないか。私は、オリエンテーションや、実習終了式のあいさつで、かけ

ねでもおせじでもなしにそう述べた。学校暴力、非行の低年齢化等が深刻な問題になっている多くの教育現場を思うと、恵まれ過ぎていと言ってもよいかも知れぬ。もっときびしい教育環境の中で、鍛えられた方がほんとうはよいのかも知れぬ。

このことを、実習生諸君がどこまで自覚していたか、まずは大過なく2週間を終えることができて、私は、一人一人に聞いてみたいと思った。

## 教育実習について

社会科 社会文化コース 井上 志保子

教育実習一追われ続けた2週間、といった感じだった。受験のころを想起させる規律正しい生活と、夜中までの教材研究――。

総科の教生像は、「教科の専門的知識もなく、かといって教育学を専門に学んでいるわけでもないから、教育方法も身につけていない。ともかく情熱的に(かむしゃらに)とりくむ」なのだそうだ。情熱的だといわれるのは悪いことではないだろうが、その裏に、教職につく者に要求される基礎的な能力を身につけていないことへの鋭い批判があることが多いわけだ。肝に命じるべきだと思う。

私の教えた部分は自分の専門ともつながりのある部分であった。にもかかわらず、よくわからずあちこちかけずりまわるはめに陥った。図書館に資料が十分あるわけでもなく、自分の本全部を福山までかついでいくわけにもいかず。結局、私の場合は、友だちに頼んで、広島から本をもってきてもらった。しかし、2,3日で何ができよう。付け焼刃はダメだなあ、というのが実感。後輩の方には、実習前に教材研究だけはすませて行くよう助言したい。

教育実習の時には、もっともっと、「どうやったらわかりやすいか」「生徒の主体性を導き出せるか」「楽しい授業になるか」といったことを考える余裕をもちたかった。

また、教育実習の体制について、皆んなで解決を計ってほしいと思うことがいくつかある。

第1は、費用の軽減。ともかくお金がかかる。交通費、宿泊費、食事代。食事はしなくては死んでしまうのでまだいいが、宿泊費で3万5千円がとんでいった。帰ったあとふりかけだけで生活したとか、バイトに追われたとか悲惨な話もきいた。

毎年のことであるけれども、この2週間、大半の人が合宿生活を経験した。いろいろ不自由なこともあったろうけれど、宿舍の準備その他について、事務の人たちの目に見えない尽力があったことも忘れないでほしい。やがて西条へ移転すれば、どの学部も同じ条件で苦勞するはずである。わが学部は、他にさきがけて、貴重な経験を積んでいるわけである。

反対に旅館でなく寮及び同窓会館に宿泊した男子は、食事に不自由していた。「教育実習に行くときやせる」という定説は、栄養失調によることを立証した。(旅館にとまった私はふとって帰ってきた。)

下宿からの通勤は無理な実習生が相当数いる以上、実習用の寮を建てるとか方法を講じてほしい。学生に6万もの出費は痛い。

第2は、教科のみでなく、生活指導にも触れさせてほしい、という願い。現実問題として難しいのはわかるが、HR参観の機会を位置づけるとかしてほしい。荒れた学校の実態を聞くたびに、教師に求められている力は、担当教科の授業実習だけではつかないと強く感じる。

以上のような点、どうか今後いい方向にむくよう期待します。

教師になりたいと真剣に思い勉強したが、教員採用試験の壁は厚い。来年私はどうしているだろう。来年度は40人学級の見送りで、45人をこえる学級がでてくるという。よりよい教育を求める側は、やる気のある教師を求めていると思うのだが――。

絶対教師になるんだ、と燃えている後輩の皆さん、がんばって下さい。

## 「K君の苦悩」

理科 情報行動科学コース 岡安 秀夫

K君の許可をもらい、来年のため、さらに今後の実習の教訓として彼の実習の日々を記す。彼のご協力に感謝します。

第一章 不運は初日から

教壇に立ち四十数人の生徒の前でたったひとりで授業をすることなど、だれにとっても初めての経験だ。K君の場合、その不運はわれわれ実習生一同の中で実習第一日目の第一番目の授業を飾るようになっていたことだ。授業の時間割は実習に入る前に決めたものだが、その決めているときK君は用事があ